

所属校名 福津市立津屋崎中学校
職・氏名 教諭 上野 喜仁

研 修 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

1 研修種別

D 福岡県教育センター研修員

2 プロジェクト研修

研究主題 自ら課題を解決しようとする生徒の育成を目指す学習指導の工夫・改善
—対話活動を位置付けた学習過程を通して—

(1) カリキュラム・マネジメントについて

本研究におけるカリキュラム・マネジメントとは、学習の基盤となる資質・能力の1つである問題発見・解決能力を育成するために教科等横断的な視点から学習指導の工夫・改善をしていくことである。問題発見・解決能力を育成するために、各教科等の学習過程に対話活動を位置付け、生徒が意見交流を通して、課題を設定したり解決の方法を判断したりできるようにする。このことによって、生徒は、他者と関わりながら、学習への意欲や具体的な見通しをもつことができるため、自ら課題を解決していくようになる。これは、所属校の教育目標「社会とつながり、主体的に課題解決に取り組む子どもの育成」の達成につながっていくと考える。本年度は社会科でその実践を行い、社会科における問題発見・解決能力育成のための効果的な学習指導の具体を明らかにする。次年度は、今年度の成果と課題を基に手立ての改善を行い、各教科等での実践に広げていく。

(2) 研究主題及び副題

ア 主題設定の理由

所属校の生徒は、実態調査から半数以上が学習課題を自ら設定することが難しいことがわかった。一方で、学習課題を設定できた生徒の多くが設定した学習課題を、学習の目標として捉えることができている。生徒が学習課題を設定できない背景には、生徒が自ら学習課題を設定するという経験が少ないことがあると考える。教師の実態としては、約4割が単元の学習課題を設定しているが、その多くが教師による課題の提示であることがわかった。また、学習課題を設定していない教師も約6割いることがわかった。教師は、学習課題を設定することの大切さや効果は実感しているものの、課題設定までの手順や方法がわからないことがその要因であると考えられる。これらのことから、教師は課題設定について難しさを感じており、そのため、生徒は学習課題を自分の事として捉えることができず、受け身で授業を受けることが多くなっていると考えられる。

所属校では、教育目標の実現に向けて生徒の「学びたい」「やってみたい」という意欲を喚起させる授業の導入を改善点に挙げている。そこで、本研究において生徒が学習課題を自分の事として捉え、解決への意欲を高められるような学習指導の工夫・改善が必要であると考え、本主題を設定した。

イ 研究の目的

自ら課題を解決しようとする生徒を育成するために、対話活動を位置付けた学習過程の在り方を探っていく。

ウ 研究の構想

(7) 研究主題について

「自ら課題を解決しようとする」とは、生徒が疑問や関心を基に「何がわかればよいのか」等を考えて、調べたいことや理解したいことを明確にしたり、「どのように調べたらよいか」を考えて思考の方法や調べ方を整理したりして、追究する内容や方法を判断していくことである。このような生徒を各教科等で目指すことで、問題発見・解決能力を育成していく。

中学校学習指導要領解説総則編では、学習の基盤となる問題発見・解決能力の育成について、各教科等において、物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定することの必要性が述べられている。吉水(2005)は「問題発見」について、生徒自身があるべき姿と現状とのギャップ、つまり、既習の知識や経験では説明できない状態を認識することで、問題を見いだすとしている。本研究では、生徒が既習の知識や経験では説明できない状態を認識することで、疑問や関心が湧き上がってくることを問題発見と捉える。生徒が疑問や関心をきっかけとして説明できない状態から抜け出そうとすることが、進んで学習に取り組むきっかけとなり、このことが「何がわかればよいのか」「どのように調べたらよいか」という主体的な課題設定や課題解決のための追究意欲につながると思われる。

以上のことから、本研究では具体的に次のような生徒の姿を目指す。

- | | |
|------------------------------------|----------------|
| ○ 学習課題を設定するための手法を理解することができる生徒 | 【知識及び技能】 |
| ○ 他者との交流を通して追究する内容や方法を判断することができる生徒 | 【思考力、判断力、表現力等】 |
| ○ 他者と協働して学習課題の解決に向けて取り組もうとする生徒 | 【学びに向かう力、人間性等】 |

(4) 副題について

「対話」について多田(2018)は、自己及び多様な他者・事象と交流し、差異を生かし、新たな智慧や価値、解決策などを共に創るとしている。本研究における「対話活動」とは、生徒が他者との交流の中で新しい視点や考えに気付くことを通して、自分の考えを創り出すことである。具体的には、単元の学習過程の導入、展開に対話活動を位置付け、意見を出し合いながら予想したり仮説を立てたりすることを通して、目的に応じて考えや事柄、優先順位を判断できるようにする。対話活動で意見や考えを伝え合う中で、生徒は判断する理由が明確となり、調べたいことや理解したいこと、追究する思考の方法や調べ方を決めることができるようになる。また、対話活動を通して取り組む具体が明確になることで、一単位時間や単元の目標や見通しをもつことができるため、自ら進んで学習に取り組むことができるようになる。生徒は判断する理由が明確となり、調べたいことや理解したいこと、追究する思考の方法や調べ方を決めることができるようになる。また、対話活動を通して取り組む具体が明確になることで、一単位時間や単元の目標や見通しをもつことができるため、自ら進んで学習に取り組むことができるようになる。

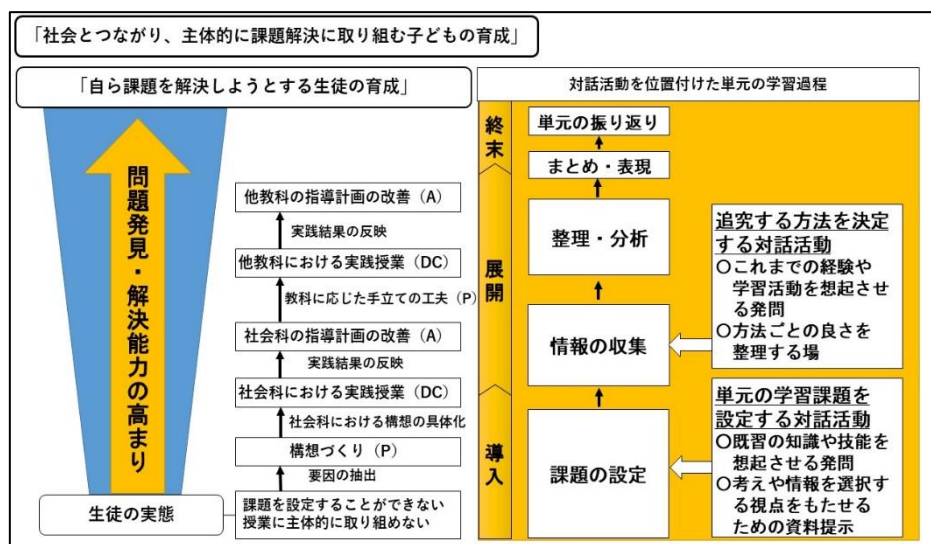


図1 研究構想図

(3) 研究の内容

ア 学習課題を自分の事として捉えられる単元の学習過程

自ら課題を解決しようとする生徒を育成するためには、生徒が既習の知識や経験では説明できない状態に向き合い、学習課題を設定して自分の事として追究していくことが必要である。

そこで、総合的な学習の時間の探究の過程（①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現）を参考にし、教科等共通で実践する問題発見・解決能力育成のための学習過程を整理した。具体的には、単元の導入、展開、終末をそれぞれ「課題の設定」、「情報の収集、整理・分析」、「まとめ・表現、単元の振り返り」とする。そして、「課題の設定」と「情報の収集」に重点を置き、「課題の設定」では生徒が疑問や関心に基づいて学習課題を設定すること、「情報の収集」では学習課題を追究するための方法を判断することで、学習課題を自分の事として捉えられるようにする。

所属校では、生徒の「学びたい」「やってみたい」という意欲を喚起させるために、疑問を引き出す問いかけなど、一単位時間の授業の導入に力を入れている。本年度初めに所属校の校長や研究主任と研究の内容について打ち合わせの中で、単元においても同様の工夫・改善が必要だと感じた。本研究では、単元の導入において、生徒が調べたいことや理解したいことを明確にして学習課題を設定し、学習の目標を立てることで生徒が自ら学習に取り組めるようにする。

イ 単元の学習課題を設定する対話活動

学習課題を設定できる生徒を育成するためには、生徒が「何が分かればよいのか」を考えながら、今までの学習で身に付けた知識や技能を活用していくことが必要である。そのために、単元の導入に対話活動を位置付け、生徒が他者との意見交流を通して必要な考えや事柄を判断できるようにする。この対話活動を支えるために、①今までの学習で身に付けた知識や技能を想起させる発問、②考えや情報を選択する視点をもたせるための資料提示を行う。①では、「今までの学習の中でどのようなことを明らかにしてきたか（できるようになったか）」と発問して、生徒が疑問を解決するために、必要な知識や技能を出し合えるようにする。②では、単元の目標にかかわる資料を提示し、生徒が調べたいことや理解したいことを選択したり絞ったりできるようにする。

他者と考えを共有し、関連付けたり、選択する理由を伝え合ったりすることで、調べたいことや理解したいことがより明確になり、学習課題を自分の事として捉えることができるようになる。

ウ 追究する方法を決定する対話活動

自ら学習課題を解決していく生徒を育成するためには、生徒が「どのように調べたらよいか」を考えながら、これまでの経験や学習活動から得た方法を活用していく必要がある。そのために、単元の展開に対話活動を位置付け、生徒が他者との意見交流を通して、思考の方法や調べ方を整理できるようにする。この対話活動は、図2に示すように単元の展開の一単位時間の授業ごとに位置付ける場合（例1）と、単元の展開の最初の授業に位置付ける場合（例2）がある。

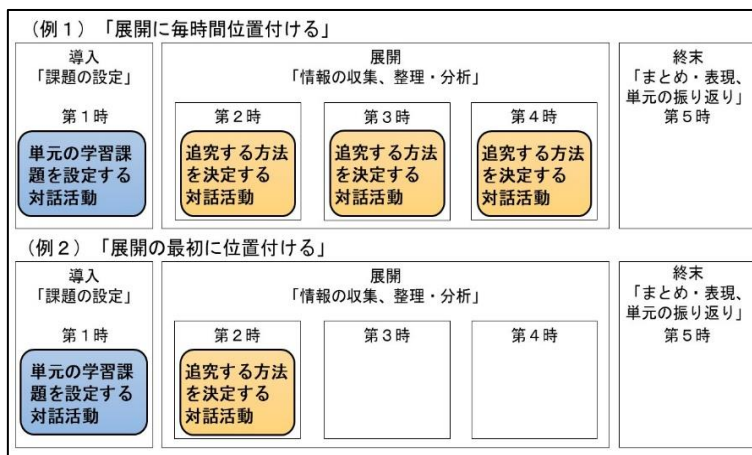


図2 単元の展開に位置付ける2つのパターン

この対話活動を支えるために、①これまでの経験や学習活動を想起させる発問、②追究する方法の良さを整理する場の設定を行う。①では、「今までにどのような取り組み方（方法）をしてきたか。」と発問し、生徒がこれまでの経験や学習活動から、追究する方法を出し合えるようにする。②では、出し合った方法の良さを整理する場を設定し、生徒が学習課題を追究するための方法を判断できるようにする。他者と協働することで、学習課題を解決していく見通しをもつことができるため、追究する方法を判断できると考える。

(4) 研究の実際

ア 学習課題を自分の事として捉えられる単元の学習過程

単元の導入（第1時）では、生徒が疑問や関心を基に調べたいことや理解したいことを考え、北海道の地域的特色を明らかにするための学習課題を設定できるようにした。また、単元の展開（第2～

4時)では、図2の(例1)に挙げたように展開の毎時間に対話活動を位置付けて、第1時で設定した単元の学習課題を追究するための方法を判断できるようにした。実践後のアンケートには、「学習課題や調べる方法を自分で決めることで、自主性をもって取り組むことができた。」等の記述が見られた。これは、生徒が学習課題を自分の事として捉え、追究していく姿であると考えられる。以上のことから、総合的な学習の時間の探究の過程を参考にして、学習過程の「課題の設定」と「情報の収集」に重点を置いたことは、生徒が学習課題を自分の事として捉え、追究していくことに有効であったと考える。

イ 単元の学習課題を設定する対話活動

単元の導入(第1時)では、北海道地方の地域的特色について生徒が疑問や関心を基に学習課題を設定できるようにすることをねらいとした。授業の始めに生徒は、北海道の特色について「寒い」「広い」を挙げることはできたが、北海道の産業や歴史的背景等との関わりまでは説明できなかった。生徒は、北海道の地域的特色について既習の知識では説明できないことに気づき、「北海道はどのような特色があるのか。」という疑問をもった。そこでまず、生徒は、特色を明らかにするために、「何が分かればよいのか(調べたらよいのか)」について考えた。その際、今までの学習を基に、追究する内容を考えさせるために「今までの学習から、北海道の特色を明らかにするためにどのような内容を調べたらよいか。」と発問した。個人で考えた内容を記述した学習プリントや対話活動から「気候や地形、自然環境について調べる。」等(資料1、2①)が見られた。また、追究する内容を考えた理由には「他の地方でも自然環境が地域の特色に影響を与えていたから。」と発言(資料2②)し、他の地方の学習で身に付けた知識を活用して考える姿が見られた。この姿から、発問によって生徒は今までの学習を想起し、身に付けた知識を活用して追究する内容を判断できたと考える。次に、生徒は個人で考えた内容を小集団で共有、整理した。その際、厳しい気候にもかかわらず農業や観光業が盛んなことに着目できるような資料を提示した。対話活動では、「なぜ、寒い北海道は農業に向かないのに農業が盛んなのか。」(資料2③)や「地形の影響が大きいのではないか。」(資料2④)等のやり取りをする姿が見られた。小集団で決定した追究する内容は、「北海道では気候が農業にどのような影響をおよぼしているのか。」であった。これは、対話活動と資料提示によって、生徒が自然環境と農業の関わりを調べたら地域的特色を明らかにできると予想して、追究する内容を判断した姿であると捉える。その後、全体において、小集団で決めた内容を基に、自然環境と農業や観光業に関連があることを確認し、単元の学習課題を「北海道では、自然環境が農業や観光業にどのような影響を与えているのだろうか。」と設定した。授業後の振り返りでは、他の地方の学習を基に追究する内容を考えることができた記述(資料3)や設定した単元の学習課題を授業の目標として捉える姿が

調べる内容	地形や気候などの自然環境
-------	--------------

資料1 生徒Aが個人で考えた調べる内容

<p>生徒A: <u>地形や気候などの自然環境。理由は、他の地方でも特色を調べた時に(自然環境が)特色と関わっていたから。</u>① もう1つはどんな産業が盛んなのか、それぞれの地方で地方にあった産業が盛んだったから、北海道でもどんな産業が盛んかわかれば特色もわかると思ったから。</p> <p>生徒B: 歴史について調べる。理由は、歴史が他の地方で農業や工業に影響を与えていたから。</p> <p>生徒C: 気候についてで、理由は寒い気候は北海道だけだと思うから、気候の影響を調べたいと思う。</p> <p>生徒D: 調べる内容は交通・通信で、理由は他の地方で調べてみてわかったことが多かったから。</p>
<p style="text-align: center;">教師による資料提示</p> <p style="text-align: center;">大雪による被害、農業生産量と生産額、観光客数の推移</p> <p>生徒C: 北海道は、雪が多くて、寒さが厳しい気候やね。</p> <p>生徒A: でも、農業や観光業が盛んな資料もある。</p> <p>生徒B: 暖かい九州では農業が盛んやったけど、寒い北海道でも農業が盛ん。</p> <p>生徒A: <u>なんで、寒い北海道は農業に向かないのに何で農業が盛んなの。</u>③</p> <p>生徒D: <u>地形(平野や山地)じゃない。</u>④</p>

資料2 生徒Aの班での対話活動の様子

<p><u>問題を解決するために調べた内容や理由を他の地方と比較して考えることができました。あと、班で話し合ったりもできました。</u></p>
--

資料3 実践授業(第1時)の生徒Aの振り返りの記述

見られた。生徒は他者と自分の考えを関連付けたり、選択する理由を他者に伝えたりすることで、調べたいことや理解したいことがより明確になったと考える。以上のことから、単元の導入に対話活動を位置付け、生徒が他者との意見交流を通して必要な考えや事柄を判断できるようにしたことは、学習課題を設定することに有効であったと考える。

ウ 追究する方法を決定する対話活動

単元の展開（第2～4時）では、毎時間の始めに対話活動を位置付け、生徒が学習課題を追究する方法を決定できるようにすることをねらいとした。第3時では、農業と農業に影響を与える事象を取り上げた。まず、生徒は、学習課題を追究するために「どのように調べたらよいか」を考えた。その際、これまでの経験や学習活動を想起させるために、「地域の特色を明らかにするために、どのような取り組み方（方法）をしてきましたか。」と発問した。対話活動では、中部地方の学習を想起し、その学習を応用しようとする姿（資料4①）が見られた。これは、発問によってこれまでの経験や学習活動が想起され、追究する具体的な方法を出し合うことができた姿であると捉える。次に、生徒は出し合ったことを基に、適した方法を小集団で話し合った。その後、追究する方法を全体で共有し、それぞれの良さを整理した。整理した後の対話活動では、「種類別に調べるより比べたほうがよい。」と発言する姿（資料4②）が見られた。これは、他地域と比較することで、より北海道の特色が明らかになると判断した姿であると捉える。方法ごとの良さを整理したことは、追究する方法を判断する際の基準を与える効果があったと考える。対話活動後に生徒が設定したためてには、「他の地方と比較して明らかにする。」「農業と気候を関連付けて明らかにする。」等の記述が見られた。生徒は、他者と自分の考えを比べたり、方法の良さを伝え合ったりすることで、追究する見通しが明確になったと考える。以上のことから、単元の展開で毎時間のはじめに対話活動を位置付け、生徒が他者との意見交流を通して追究する方法の良さを整理できるようにしたことは、一単位時間の授業を見通して学習課題を追究する方法を判断することに有効であったと考える。

生徒C：東海の農業を調べた時に、九州地方と比べたから、同じように北海道と九州の農業を比べたらいいんじゃない。①

生徒B：いいかも。

生徒A：でも、農業と自然環境は関係があるけん、最初から農業と自然環境の関係を調べてもいいんじゃない。

生徒D：稲作、畑作とか農業の種類別に調べたら。

全体で、取り組み方の共有と
それぞれの良さを整理する場面を設定

生徒A：北海道の農業の特色っていう他の地方とは違うところを探すんだから、種類別に調べるより比べたほうがいいんじゃない。②

資料4 生徒Aの班での対話活動の様子

これは、発問によってこれまでの経験や学習活動が想起され、追究する具体的な方法を出し合うことができた姿であると捉える。次に、生徒は出し合ったことを基に、適した方法を小集団で話し合った。その後、追究する方法を全体で共有し、それぞれの良さを整理した。整理した後の対話活動では、「種類別に調べるより比べたほうがよい。」と発言する姿（資料4②）が見られた。これは、他地域と比較することで、より北海道の特色が明らかになると判断した姿であると捉える。方法ごとの良さを整理したことは、追究する方法を判断する際の基準を与える効果があったと考える。対話活動後に生徒が設定したためてには、「他の地方と比較して明らかにする。」「農業と気候を関連付けて明らかにする。」等の記述が見られた。生徒は、他者と自分の考えを比べたり、方法の良さを伝え合ったりすることで、追究する見通しが明確になったと考える。以上のことから、単元の展開で毎時間のはじめに対話活動を位置付け、生徒が他者との意見交流を通して追究する方法の良さを整理できるようにしたことは、一単位時間の授業を見通して学習課題を追究する方法を判断することに有効であったと考える。

(5) 全体考察

図3は、「知識及び技能」に関する目指した姿について、学習課題を設定するための手法を理解しているかを実態調査と実践授業で比較したものである。実践前後で、今までの学習で身に付けた知識を活用して学習課題を設定できた生徒は34.0ポイント増加した。授業の振り返りシートには、「今までの学習をもとに取り組むこと（調べていきたいこと）を決めることができた。」や「学習してきた日本の他の地域と結び付けて学習課題を立てることができた。」等の記述が見られた。これは、生徒が「今までの学習で身に付けた知識を活用して追究する内容を決定する」という、学習課題を設定する手法の1つを理解している姿であると捉える。以上のことから、単元の導入に対話活動を位置付け、生徒がこれまでの学習を想起できるように発問したことや小集団で知識を出し合ったことが、学習課題を設定するための手法を理解することに有効であったと考える。

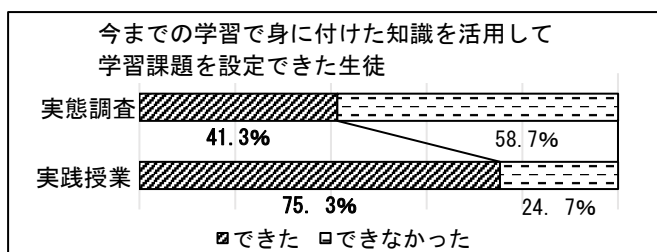


図3 今までの学習で身に付けた知識を活用して学習課題を設定できた生徒の変容

等々の記述が見られた。これは、生徒が「今までの学習で身に付けた知識を活用して追究する内容を決定する」という、学習課題を設定する手法の1つを理解している姿であると捉える。以上のことから、単元の導入に対話活動を位置付け、生徒がこれまでの学習を想起できるように発問したことや小集団で知識を出し合ったことが、学習課題を設定するための手法を理解することに有効であったと考える。

図4は、「思考力、判断力、表現力等」に関する目指した姿について、学習プリントに、調べたいことやわかりたいことの具体を挙げ、関連付けて学習課題を設定できたかを分析したものである。

A評価が14.6%、B評価が77.7%、C評価が7.7%であった。これは、対話活動によって多くの生徒が追究する内容を関連付けて判断できた結果と考える。また、図5は、学習プリントから、追究する方法について分析したものである。A評価が36.0%、B評価が57.5%、C評価が6.5%となった。これは、追究する方法を小集団で出し合い、良さを整理することで適した方法を判断できた結果と考える。実践後のアンケートには、「班の人と交流することでいろいろな意見のなかから決めることができた。」や「話し合いをしたことで取り組み方を決められた。」等の記述が見られた。以上のことから、2つの対話活動を位置付けたことや、調べたいことを明確にするための視点を与えたり、思考の方法を整理するための基準を与えたりしたことが、追究する内容や方法を判断することができる生徒の育成に有効であったと考える。

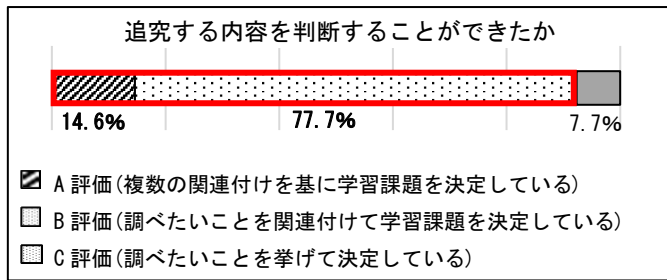


図4 追究する内容を判断することができた生徒の割合

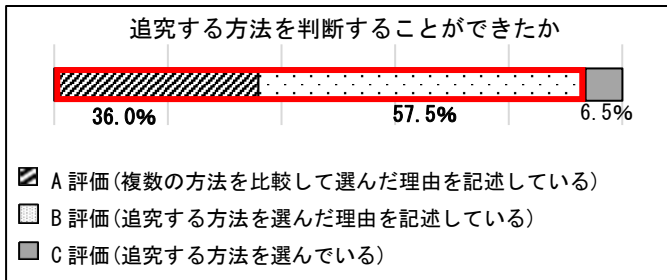


図5 追究する方法を判断することができた生徒の割合

図6は、「学びに向かう力、人間性等」に関する目指した姿について、実態調査と実践授業後に行ったアンケートのうち、「進んで学習課題の解決に向けて取り組むことができますか。」の項目の比較である。実践後には、「できた」「だいたいできた」と答えた生徒が約40ポイント増加している。実践後のアンケートには「自分たちで取り組む内容や方法を定めることで、今までより積極的に授業に取り組むことができた。」や「自分たちで定めることで目標をもちながら授業に取り組むことができた。」という記述が見られた。これは、生徒が学習課題の解決に向けて主体的に取り組めるようになった姿であると捉える。以上のことから、単元の学習過程に対話活動を位置付け、他者と交流して学習課題を設定し、追究する方法を判断できるようにしたことは学習課題の解決に向けて取り組もうとする生徒の育成に有効であったと考える。

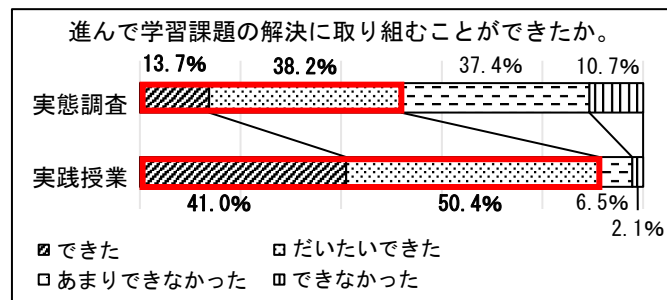


図6 進んで学習課題の解決に取り組んだ生徒の割合の変容

(6) 研究の成果と今後の課題

ア 研究の成果

- 単元の学習過程に対話活動を位置付けたことで、生徒は他者の意見を取り入れて考えを創り出したり、他者と意見を出し合い、結果を予想したりできたので、追究する内容や方法を判断していく上で有効であった。

イ 今後の課題

- 今回の実践では社会科の経験や学習活動から思考する方法や調べ方を考えた。今後は、各教科等での経験や学びを基に生徒が思考する方法や調べ方を判断できる手立てが必要である。

<参考文献>

- ・文部科学省(2018) 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編』 p.52 東山書房
- ・吉水 裕也(2005) 「問題発見能力を育成する『総合的な学習の時間』の授業構成-廃棄車椅子を用いた授業の分析を通して-」 p.22 『岐阜聖徳学園大学紀要』 第48号
- ・多田 孝志(2018) 『対話型授業の理論と実践 深い思考を生起させる12の要件』 p.4 教育出版
- ・文部科学省(2018) 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編』 p.9 東山書房

【添付資料】

○ 既習の知識を生かす重点単元の設定

(第2学年 社会科の指導計画)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
社会科	地理分野								歴史分野			
	3編2章日本の地域的特色と地域区分	3章日本の諸地域 九州地方	3章日本の諸地域 中国・四国地方 近畿地方	3章日本の諸地域 中部地方		3章日本の諸地域 関東地方	3章日本の諸地域 東北地方	3章日本の諸地域 北海道地方 4章地域の在り方	第3節 武士による支配の完成 第4節 天下泰平の世の中	第5節 社会の変化と幕府の対策 第4章第1節 欧米諸国における「近代化」	第2節 開国と幕府の終わり 第3節 明治政府による「近代化」の始まり	第4節 近代国家への歩み 第5節 帝国主義と日本 第6節 アジアの強国の光と影

対話活動で既習の知識や今までの経験や学習活動を活用できるように、北海道地方を重点単元として設定した。

○ 実践授業の単元計画（6時間）

単元名「北海道地方の様子 - 自然環境をテーマに -」

- 目標 ○ 北海道地方の地域的特色を明らかにする課題を設定し、調査活動や諸資料から課題解決に必要な情報を調べまとめることを通して、自然環境と産業との関わりや厳しい自然環境から生じる課題について理解することができる。 【知識及び技能】
- 地域の広がりや人々の対応に着目し、特色ある自然環境と産業などを関連付けて考察し、北海道地方の地域的特色について表現できる。 【思考力、判断力、表現力等】
- 課題設定や課題追究に協働的に取り組み、北海道地方の地域的特色を意欲的に追究しようとする。 【学びに向かう力、人間性等】

単元計画

次	学習過程	時	学習活動・学習内容	(○) 指導上の留意点
1	課題の設定	1	1. 疑問を基に単元の学習課題を設定する。 ・北海道では、厳しい自然環境が産業にどのような影響を与えているのか。 【単元の学習課題を設定する対話活動】	○ 既習の知識から調べる内容を考えることができるよう発問する。 ○ 北海道の自然環境と産業の関係に着目できるような資料提示を行う。
2	情報の収集 整理・分析	3	1. 北海道地方の自然環境や歴史的背景を調べ、人々の生活との関係についてとらえる。 【追究する方法を決定する対話活動】 ・厳しい寒さにおける人々の工夫（住居、交通網、街づくり） 2. 北海道地方の自然環境と農業の関係について調べ、まとめる。 【追究する方法を決定する対話活動】 ・農業に適さない土壌の改良 ・寒さに強い農作物の品種改良 ・広い土地を生かした大規模農業 3. 北海道地方の観光業と自然環境との関係について調べる。 【追究する方法を決定する対話活動】 ・冬の降雪を生かした観光業 ・夏の涼しい気候を生かした観光資源	○ 今までの学習活動から思考の方法を考えることができるよう発問する。 ○ 追究する方法を全体で共有し、それぞれの良さを整理する場を設定する。 ○ 今までの学習活動から思考の方法を考えることができるよう発問する。 ○ 追究する方法を全体で共有し、それぞれの良さを整理する場を設定する。 ○ 今までの学習活動から思考の方法を考えることができるよう発問する。 ○ 追究する方法を全体で共有し、それぞれの良さを整理する場を設定する。
3	まとめ・表現 単元の振り返り	2	1. 自然環境や産業、歴史的背景について調べた情報をXチャートにまとめる。 2. Xチャートを基に北海道の特色を記述する。 ・自然環境を生かしたり克服したりして産業を発展させてきた。	○ 調べたことを関連付けて、事象が生じる原因や背景を説明するよう促す。 ○ Xチャートで整理したことを根拠に学習課題に対する答えを表現するよう促す。 ○ 小集団で交流を基に再度、自分の意見を考えることができるようにする。

○ 実際の生徒の様子

次	学習過程	生徒が実際に設定した学習課題やまとめ	
		生徒 E	生徒 F
1	課題の設定	<p>小集団で決めた取り組むこと 北海道の農業に地形と気候がどのように関係（影響）しているのか。</p> <p>単元の学習課題 北海道では、自然環境が農業や観光業にどのような影響を与えているのだろうか。</p>	<p>小集団で決めた取り組むこと 北海道地方の観光業が盛んなことに、自然環境は関係しているのか。</p> <p>単元の学習課題 北海道では自然環境がどのように農業や観光業に影響を与えているのか。</p>
2	情報の収集 整理・分析	<p>第3時のめあて 北海道の農業の特色について九州地方と比較して明らかにしよう。</p> <p>第3時のまとめ 北海道の農業は、他の地方と違って耕地面積が広く、稲作に向いていなかった土壌を、温冷床育苗やタコ足での種まき、客土事業によって克服し、品種改良をして、農業を盛んにした特色があった。</p>	<p>第3時のめあて 北海道地方の農業の特色を、種類別に調べて明らかにしよう。</p> <p>第3時のまとめ 北海道の農業は、気候が厳しい中、畜産、稲作、畑作の農業を行っている。そんな中、泥炭地により土壌が悪く、農業が難しかった。そこで、温冷床育苗の技術革新、品種改良により生産することができた。気候をうまく活用した畜産等の対策により農業が盛んになった。</p>
3	まとめ・表現 単元の振り返り	<p>個人で考えた課題への答え 農業では、稲作や畑作に向いていなかったが、客土事業を行い、土壌を農業に適した土壌にし、品種改良により寒さに強く味の良い米を作ったことで、米の生産が盛んになった。 観光業では、気候を生かして、リゾート地として利用され、祭りなどにより観光客がとて増えている、酪農で作られたバターを使ったお土産もある。</p> <p>単元のまとめ 北海道は雪が多く、とても寒い気候により、稲作や畑作が向いていなかったが、広い土地を生かすため、客土事業を行い、日本でも有数の米の産地となった。他にも、その気候を生かして観光地となったり、酪農によって作られたバターを材料にして、お菓子をお土産にしたりしていた。自然環境が農業や観光業に良い面をもたらしているし、それにより農業が観光業にも良い面をもたらすことのできる特色があった。</p>	<p>個人で考えた課題への答え 北海道の自然環境は農業、観光業に大きな影響を与えている。農業については、降雪の多さや耕地に適さない泥炭地があり、稲作ができなかったが、客土を行い、土壌を改良し、そもそも米を寒さに強くなるよう品種改良した。また、他と圧倒的な違いである土地の広さを生かして大規模な農業を行っている。観光業については、積雪を生かした、札幌雪まつり等のイベントの開催や広大な土地を生かした観光施設の建設、スキーや流水を見られるツアーなどで外国人観光客も多い。以上の事から、北海道の自然環境は、農業、観光業に大きく影響を与えている。</p> <p>単元のまとめ 北海道は、土地の面積が広く、自然が豊富である。そんな中、農業では、夏の涼しい気候や広い耕地面積を生かす等、環境をうまく活用している。観光業では、積雪の多い気候、自然豊かな地形が観光客の数を増やしている。北海道は他の地域より寒い中、それに対する対策を行い、厳しい気候等の影響を有効活用できるように人々が改善することで、克服し農業や観光業が盛んな地域となった。</p>